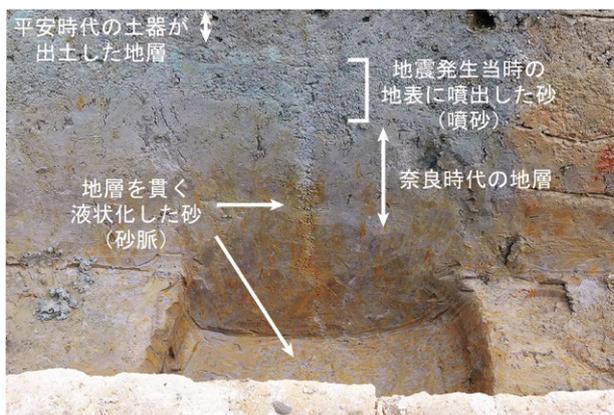


❀ 平城第612次・第613次発掘調査 現場から発見された地震痕跡

近年、平城や藤原の宮・京跡の発掘調査にもなって、あちらこちらで過去の地震痕跡が発見されています。その多くは、震度5弱以上の巨大地震によって起きやすいとされる「液状化現象」の痕跡でした。

そのような中、新たに平城宮第一次大極殿院地区(平城第612次調査)や法華寺阿弥陀浄土院隣接地(平城第613次調査)において、過去の巨大地震の痕跡が発見されました。今回の発見には、注目すべき点が2つあります。1つ目は、地震によって液状化し地面を貫いて噴き出した砂(=噴砂)が、高さ80cmほどの大きな丘状の地形(=墳丘)をつくり、周辺に流れ出していく痕跡です。平城第612次調査の宮造営以前の地層から検出されました。その様相は、まさに現代で発生する液状化現象と同様で、発掘調査をする際に地層の中で地震の痕跡がどのように見えるのかという好事例の一つとなります。2つ目は、平城第613次調査から見つかりました。奈良時代の地層を貫いた砂が、遺構の上を覆い、その砂の上の地層からは平安時代のものと推定される土器片が出土しました。これは地震の発生時期が推定される痕跡で、史料を紐解くと、天平17(745)年、天平宝字6(762)年、天長4(827)年、承和8(841)年、斉衡2(855)年に近畿圏が地震によって被災したことが記録されています。実際の地震はこれだけではないかもしれませんが。しかしこのように、地域の被災履歴を丁寧に読み取ることによって、地域防災・減災に役立てていきたいと考えています。(埋蔵文化財センター 村田 泰輔)



平城第613次調査で発見された地震痕跡